

# **子どもの生活に関する実態調査**

## **結果報告書**

**(概要版)**

**平成 29 年3月**

**堺 市**

# I. 調査の概要

## 1 調査目的

本調査は、子育て世帯の経済状況、生活状況、子どもへの影響、支援ニーズ等について調査・分析し、本市の子どもへの支援施策の方向性を検討することを目的に行いました。

## 2 調査対象

調査対象者は、一般調査は5歳、小学5年生、中学2年生、16歳の各年齢（平成28年4月1日現在の満年齢）の子どもがいる6,000世帯を無作為抽出しました。支援利用者調査は、生活保護、児童扶養手当、就学援助のいずれかを利用している同年齢の子どもがいる1,500世帯を無作為抽出しました。なお、一般調査と支援利用者調査は、同一の調査内容となっています。

調査種類	調査対象	対象世帯数
一般調査	5歳（就学前）、小学5年生、中学2年生、16歳（高校2年生相当）の各年齢の子どもがいる世帯。	6,000世帯 （無作為抽出）
支援利用者調査	生活保護、児童扶養手当、就学援助のいずれかを利用している各年齢（一般調査と同区分*）の子どもがいる世帯。 ただし、一般調査の対象世帯を除く。 <small>※就学援助は小学5年生と中学2年生のみ</small>	1,500世帯 （無作為抽出）

## 3 調査期間と方法

- ・調査期間 平成28年7月29日～8月12日
- ・調査方法 郵送配布・郵送回収

対象世帯	回答者	配布・回収方法
5歳の子どもがいる世帯	保護者	保護者向け調査票を郵送配布。同封の返信用封筒を用いて返送いただいた。
小学5年生、中学2年生、16歳の子どもがいる世帯	保護者と子ども	保護者向け調査票と、子ども向け調査票を同封して郵送配布。回収は、保護者向け調査票と、子ども用封筒に封緘した子ども向け調査票を、返信用封筒に同封して返送いただいた。

## 4 回収数

- ・保護者向け調査票

調査対象	子どもの年齢等	対象者数	回収数	回収率
一般調査	計	6,000	2,614	43.6%
	5歳	1,500	854	56.9%
	小学5年生・中学2年生	3,000	1,269	42.3%
	16歳	1,500	491	32.7%
支援利用者調査	計	1,500	511	34.1%
	5歳	250	108	43.2%
	小学5年生・中学2年生	1,000	335	33.5%
	16歳	250	68	27.2%

- ・子ども向け調査票

調査対象	子どもの年齢等	対象者数	回収数	回収率
一般調査	計	4,500	1,713	38.1%
	小学5年生・中学2年生	3,000	1,233	41.1%
	16歳	1,500	480	32.0%
支援利用者調査	計	1,250	389	31.1%
	小学5年生・中学2年	1,000	324	32.4%
	16歳	250	65	26.0%

## 5 調査内容

保護者向け調査票	子ども向け調査票
1 回答者の続柄	1 学校段階
2 日常生活でよく使う言葉	2 起床時間
3 世帯の状況	3 帰宅時間
4 住居形態	4 就寝時間
5 自家用車の所有状況	5 朝食について
6 家計の収支状況	6 夕食について
7 この半年間に経済的な理由で経験したこと	7 昼食について
8 親の最終学歴	8 風呂について
9 親の就業状況	9 遅刻について
10 保護者が家にいる時間帯	10 家族とのかかわり
11 在宅時、子どもと過ごす時間が長い人	11 毎日の生活で楽しいと思うとき
12 学童保育の利用状況	12 放課後を誰と過ごすか
13 この1年間に経済的な理由で経験したこと	13 放課後をどこで過ごすか
14 子どもとの関係	14 1日の勉強時間
15 子どもの進学についての希望	15 家での勉強場所
16 子どもが希望どおり進学できると思うか	16 1日の読書時間
17 希望どおり進学できないと思う理由	17 学校の勉強について
18 不登校の経験	18 アルバイトについて
19 家の居心地	19 こづかいについて
20 自宅や学校以外の居場所について	20 いやなことや悩んでいること
21 初めて親となった年齢	21 相談相手
22 相談相手の有無	22 自分のことを理解・手助けしてくれる人
23 相談相手	23 持っているもの、使うことができるもの
24 不安やイライラを子どもに向けてしまうこと	24 ふだん考えていること
25 成人する前に経験したこと	25 将来どの学校まで行きたいか
26 自分自身への評価	26 将来への期待感
27 心身の状態について	27 自分の家の居心地
28 家計の経済状況	28 健康状態
29 自由記述	29 自分は幸せだと思うか
30 子どもの生活習慣について-起床時間	30 自宅や学校以外の居場所について
31 就寝時間	31 自由記述
32 朝食について	
33 夕食について	
34 昼食について	
35 お風呂について	

## 6 等価可処分所得別集計について

一般調査の保護者票における世帯員の人数と可処分所得から等価可処分所得を算出し、困窮の程度を次の4つの層に分類しています。調査結果から算出された等価可処分所得の中央値は235万円となっています。

	等価可処分所得の範囲	世帯の割合
分類Ⅰ	等価可処分所得中央値（235万円）以上の層	49.8%
分類Ⅱ	等価可処分所得中央値未満から60%以上の層	29.0%
分類Ⅲ	等価可処分所得中央値の50%以上60%未満の層	5.4%
分類Ⅳ	等価可処分所得中央値の50%未満の層（貧困線未満）	15.8%

※本調査では可処分所得を50万円～100万円といった数値の幅を持たせた選択肢で把握しているため、選択肢の上限値と下限値の平均値を用いて等価可処分所得を算出しています。

（例）可処分所得が「500～550万円」の場合、可処分所得を525万円として等価可処分所得を算出。

## 7 報告書の見方

回答結果の割合「%」は、小数点以下第2位で四捨五入したものです。そのため、単数回答であっても合計値が100.0%にならない場合があります。

図表等の「N (number of case)」は、有効標本数（集計対象者総数）を表しています。各設問の図表上の「MA%」や「3LA%」等の表記は、回答選択肢の中からあてはまるものを複数選択する場合（すべてに○、3つまで○等）を示しています。

## Ⅱ. 主な調査結果

### 生活困窮の状況

等価可処分所得別の集計で、分類Ⅳ（貧困線未満）に該当する相対的に貧困状態にある世帯の割合は 15.8%となっています。また、分類Ⅳの世帯に属する子どもの数が子ども全体に占める割合（子どもの貧困率）を試算すると 15.9%でした。

〔等価可処分所得別の割合〕

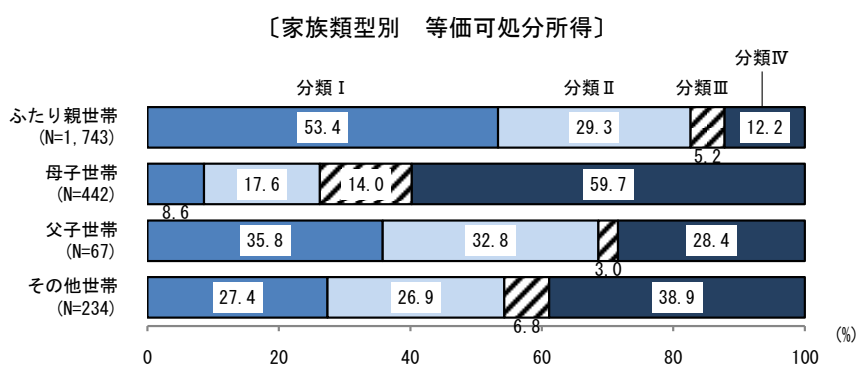
	等価可処分所得の範囲	世帯の割合	子どもの割合
分類Ⅰ	等価可処分所得中央値（235万円）以上の層	49.8%	48.0%
分類Ⅱ	等価可処分所得中央値未満から60%以上の層	29.0%	31.0%
分類Ⅲ	等価可処分所得中央値の50%以上60%未満の層	5.4%	5.1%
分類Ⅳ	等価可処分所得中央値の50%未満の層（貧困線未満）	15.8%	15.9%

### 生活困窮の背景

生活困窮の背景を世帯や保護者の状況からみると、「母子世帯」「非正規就業」「健康状態がよくない」状態の世帯は、貧困状態（分類Ⅳ 貧困線未満の世帯。以下同様。）の割合が高くなっていることが分かります。また、保護者自身の成育過程での経験（生活困窮、両親の離婚等）と現在の生活状況に関連性がみられ、世代間で連鎖している状況がうかがえます。

#### ・家族類型との関係

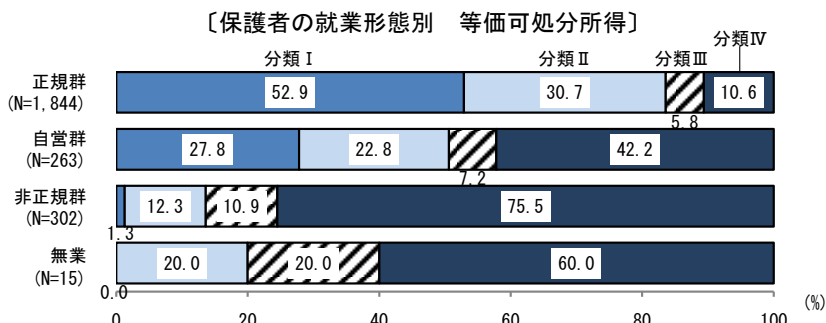
家族類型別に等価可処分所得の分類をみると、母子世帯では分類Ⅳの割合が 59.7%と高くなって高く、母子世帯は貧困の状態になりやすいといえます。



※「ふたり親世帯」は父母と子のみ、「母子世帯」は母と子のみ、「父子世帯」は父と子だけの世帯を集計。祖父母等を含む場合は、「その他世帯」として集計。

・ 保護者の就業形態との関係

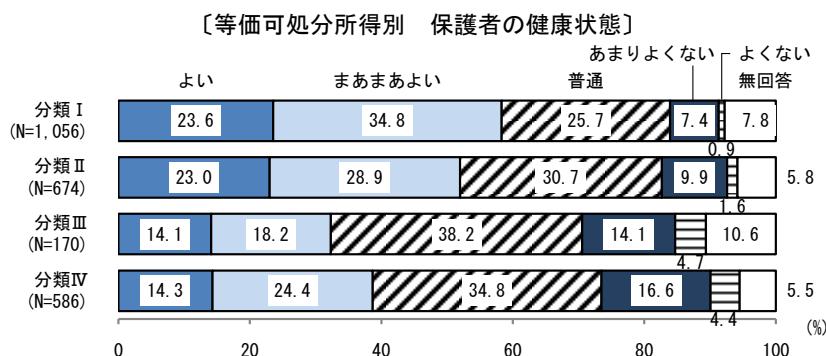
保護者の就業形態が非正規群では 75.5%が分類Ⅳとなっており、保護者が非正規雇用の世帯は貧困の状態になりやすい傾向があります。



※父母等に常勤・正規職員が含まれている場合に「正規群」として集計。それ以外で、自営業・家業が含まれている場合に「自営群」として集計。それ以外で、パートまたはアルバイト、非正規職員が含まれている場合に「非正規群」として集計。「その他」と無回答を除く。

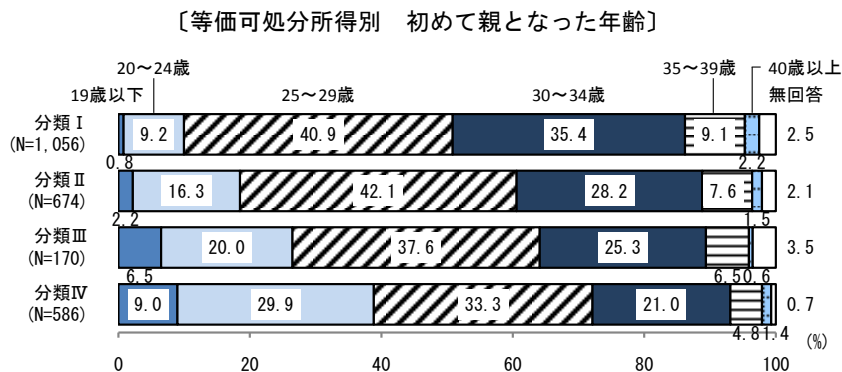
・ 保護者の健康状態との関係

分類Ⅳでは、保護者の健康状態について「あまりよくない」と「よくない」の合計が 21.0% となっており、分類Ⅰの 8.3%に比べて、健康状態がよくない方の割合が 2 倍以上高くなっています。



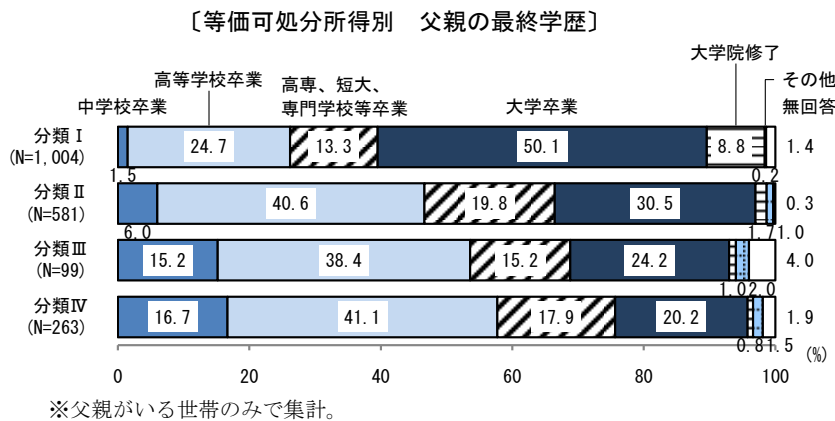
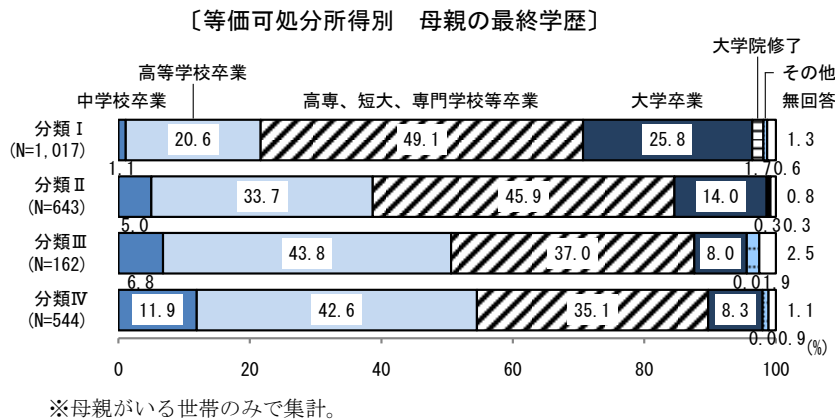
・ 保護者が初めて親となった年齢との関係

等価可処分所得が低い世帯の保護者ほど、初めて親となった年齢が低い傾向にあり、24歳以下で親となった割合は、分類Ⅰが約 1 割であるのに対して、分類Ⅳは約 4 割となっています。



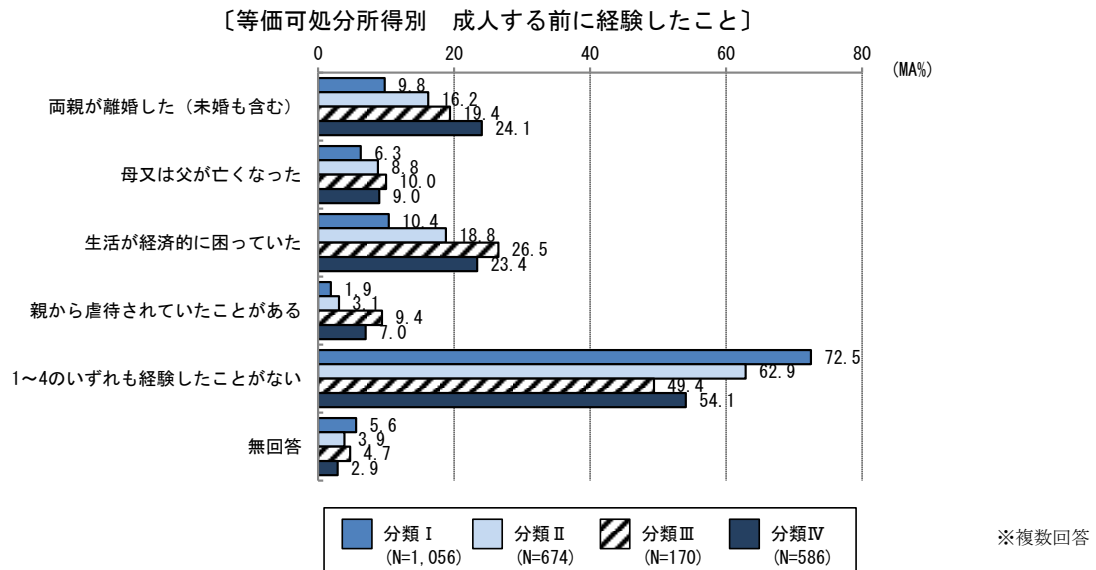
・保護者の最終学歴との関係

最終学歴については、母親、父親ともに、分類Ⅳは分類Ⅰに比べて、「中学校卒業」と「高等学校卒業」の割合の合計が2倍以上高くなっています。「中学校卒業」に限ると、母親、父親ともに、分類Ⅳは分類Ⅰに比べて、10倍以上高くなっています。



・保護者が成人する前に経験したこととの関係

分類Ⅳでは、分類Ⅰに比べて、子どもの頃に両親の離婚や、生活の困窮、親からの虐待などを経験している保護者が多くなっています。分類Ⅳでは約4人に1人が成人する前に「生活が経済的に困っていた」と回答しており、世代間で連鎖している状況がうかがえます。

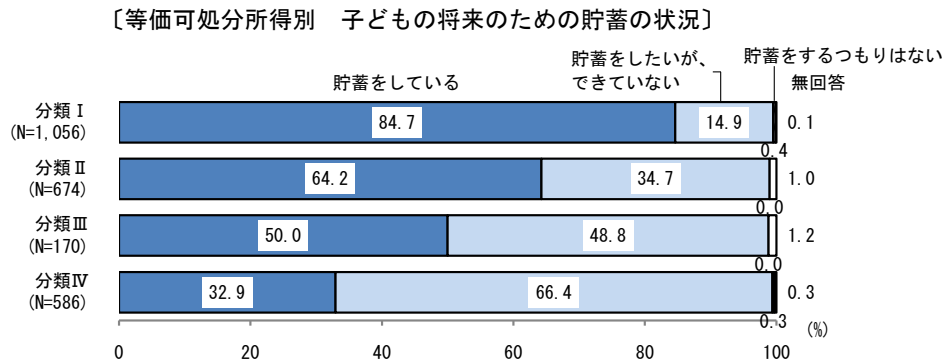


## 子どもの持ち物・経験等

貧困状態にある世帯の子どもは、生活必需品以外で子どもが通常持っている物を持っておらず、一般的に経験できる活動を経験できていない状況（相対的剥奪状況）にあることがわかります。また、貧困状態の世帯は、子どもの将来のために貯蓄をせず、16歳の子どもが家計を支えるためにアルバイトをしているケースが多いことから、その後の成長過程を通して、物質面・経験面で相対的剥奪状況になりやすいことが推測されます。

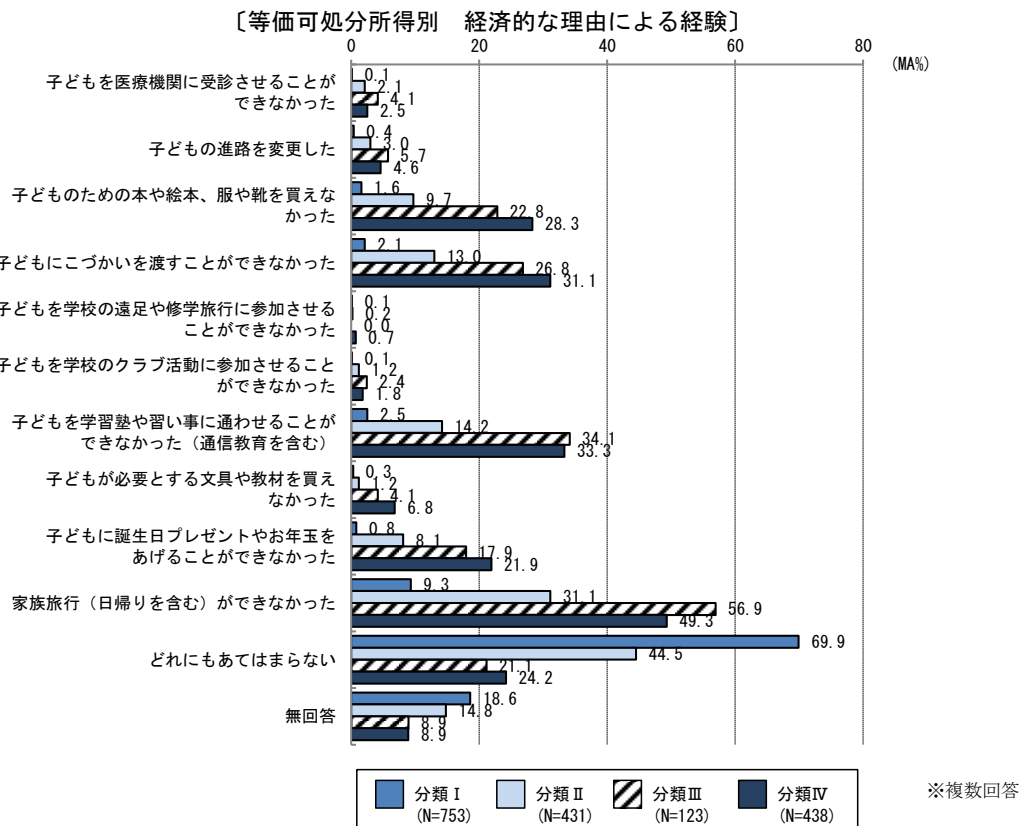
### ・子どもの将来のための貯蓄

等価可処分所得が低くなるほど子どもの将来のために貯蓄をしている世帯の割合は低くなり、分類Ⅳでは約3割の世帯しか貯蓄ができていません。貧困状態にある世帯では子どもの将来のための備えが十分できていない状況がうかがえます。



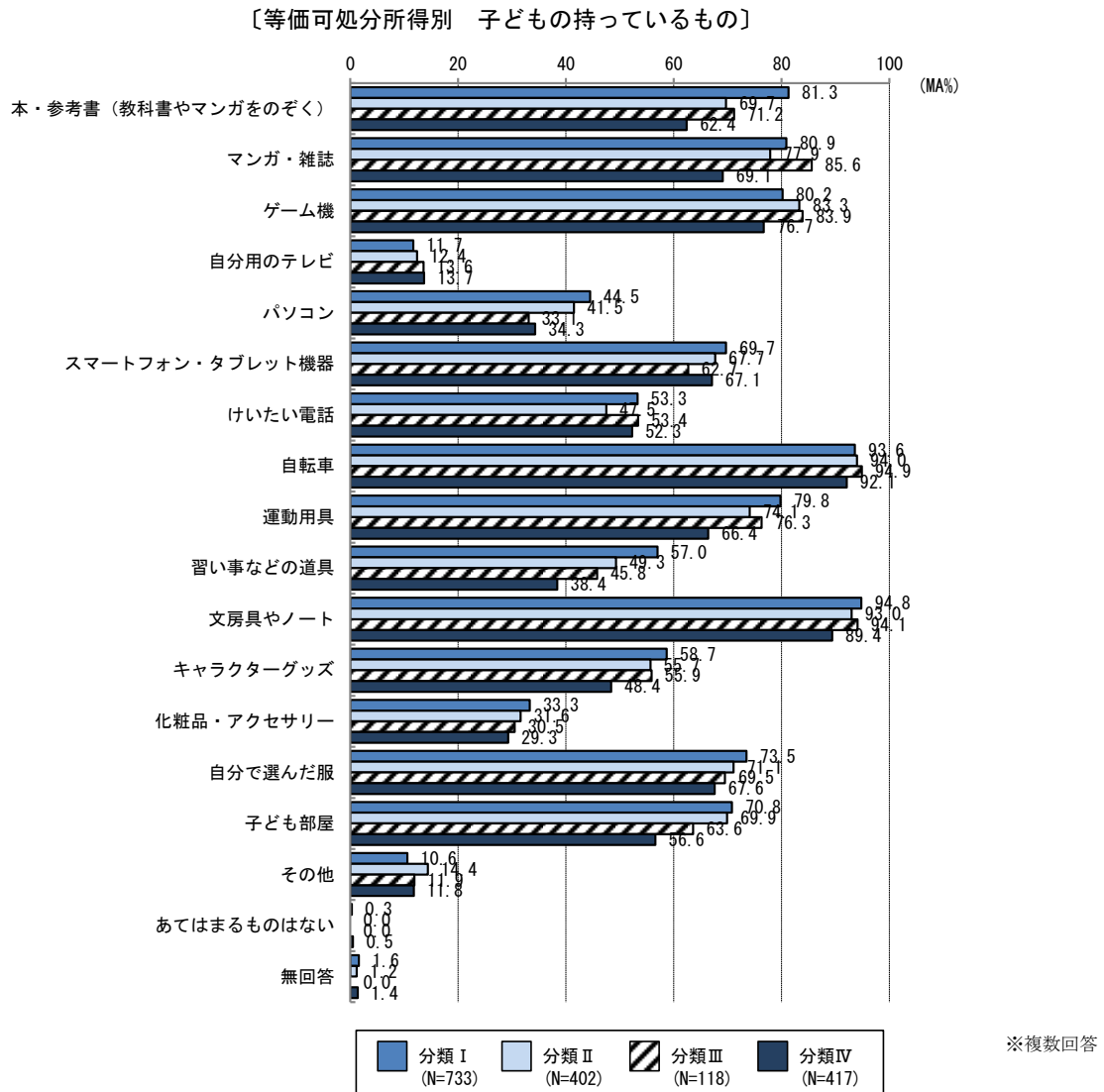
### ・経済的な理由で子どものためにできなかったこと

「家族旅行」「学習塾や習い事」「こづかい」等は、等価可処分所得による差が大きく、「遠足・修学旅行への参加」「クラブ活動への参加」「医療機関の受診」については差がみられません。また、「どれにもあてはまらない」と答えた割合は、分類Ⅰが約7割なのに対し、分類Ⅳは2割台でした。



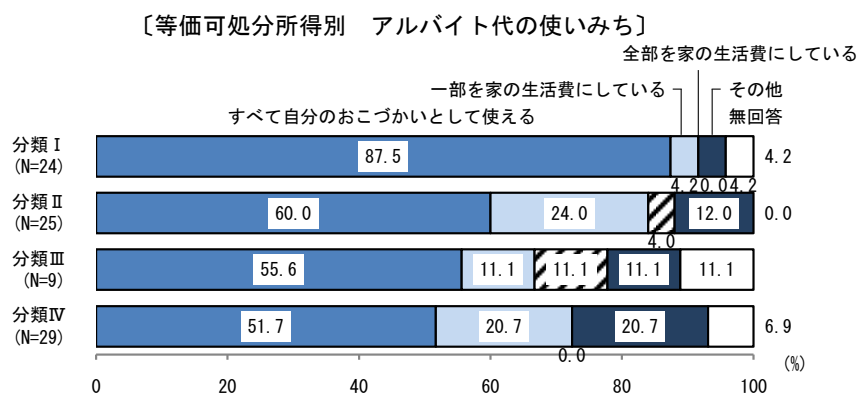
## ・子どもの持っているもの

分類Ⅳは、分類Ⅰに比べて、子どもの持っているものが全体的に少ない傾向にあり、特に、「本・参考書」「習い事などの道具」「子ども部屋」などで差が大きくなっています。一方、「ゲーム機」「スマートフォン」「けいたい電話」「自転車」等は、所得による顕著な違いはみられませんでした。



## ・アルバイト代を家計に入れている子どもの割合

アルバイトをしている16歳の子どものアルバイト代の使いみちについて、一部または全部を「家の生活費にしている」は、分類Ⅰが4.2%なのに対して、分類Ⅱ～Ⅳの世帯はいずれも20%を超えており、等価可処分所得が低い世帯ほど家計を支えるためにアルバイトをしている子どもが多い傾向がみられます。



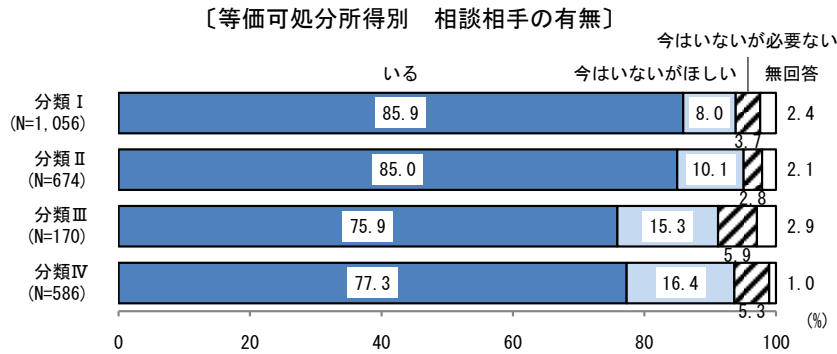


## 社会的孤立・孤独、心身の状況

貧困状態にある世帯の保護者は、相談相手がいない割合や、育児を含む現在の生活を楽しめていない割合が高い状況にあることが分かります。

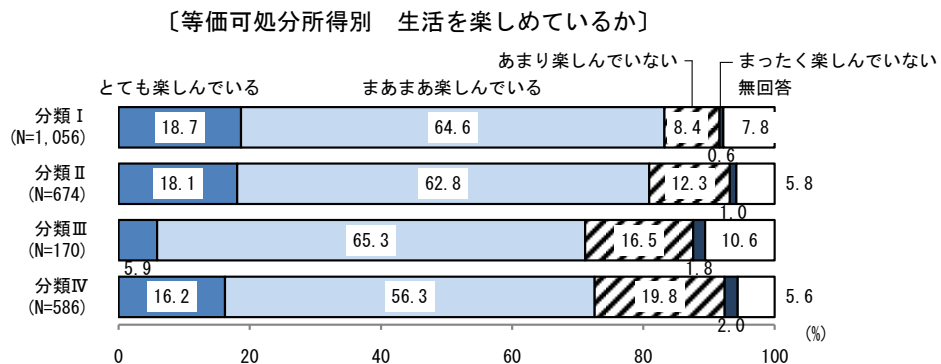
### ・保護者の相談相手

心おきなく相談できる相手が「今はないがほしい」「今はないが不要ない」を合わせた割合は、分類Ⅰの11.7%に対して、分類Ⅳは21.7%となっており、2倍近く高くなっています。



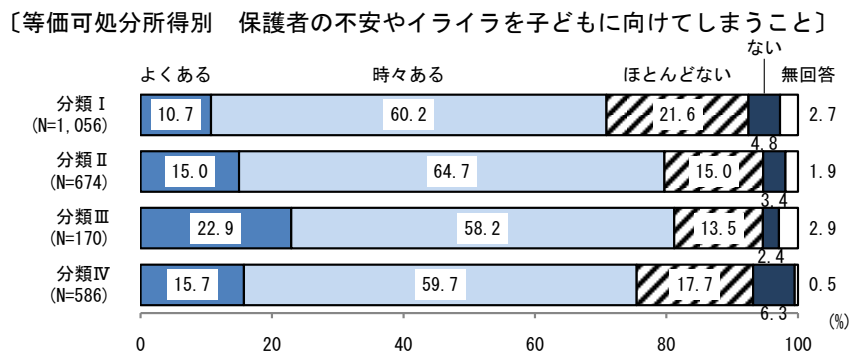
### ・仕事や家事、育児など生活を楽しめているか

分類ⅢやⅣは、分類Ⅰに比べて、生活を「あまり楽しんでいない」「まったく楽しんでいない」割合が高くなっています。



### ・保護者の不安やイライラを子どもに向けてしまうこと

分類Ⅱ～Ⅳは、分類Ⅰと比べて、保護者の不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうことが「よくある」と答えた割合がやや高くなっています。



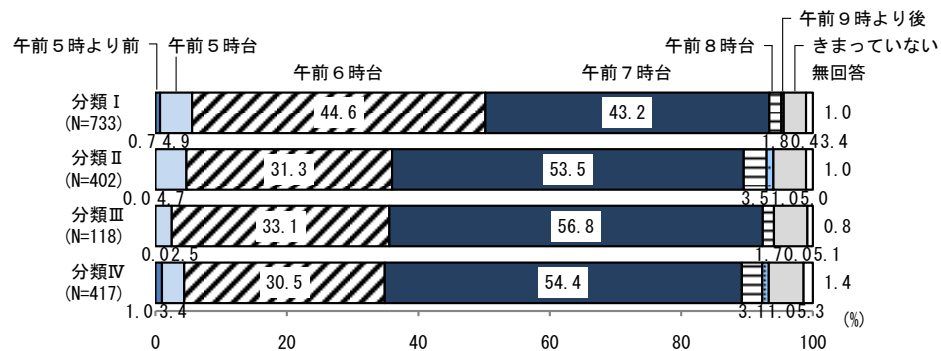
## 生活習慣、家族の関わり

貧困の状態にある世帯の子どもは、基本的な生活習慣が身についていない割合がやや高い傾向がみられます。夕食の孤食の割合（大人と夕食を食べる頻度が週に半分より少ない世帯）は、学年が上がるほど増加しますが所得による違いはなく、また、自分の家の居心地についても所得にかかわらず9割以上の子どもが「居心地がいい」と答えています。

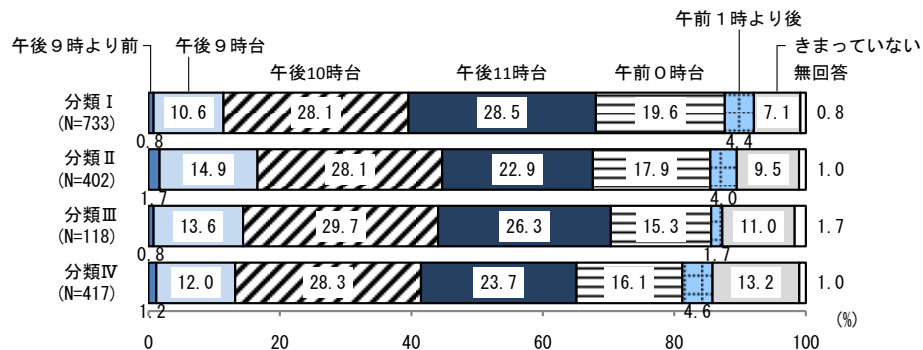
### ・子どもの基本的な生活習慣

分類Ⅱ～Ⅳでは、分類Ⅰに比べて、起床時間については「午前7時台」の割合が高く、就寝時間については「決まっていない」が高くなっています。また、朝食の摂取については「毎日・ほぼ毎日」の割合が低く、「遅刻はしない」が低くなっています。

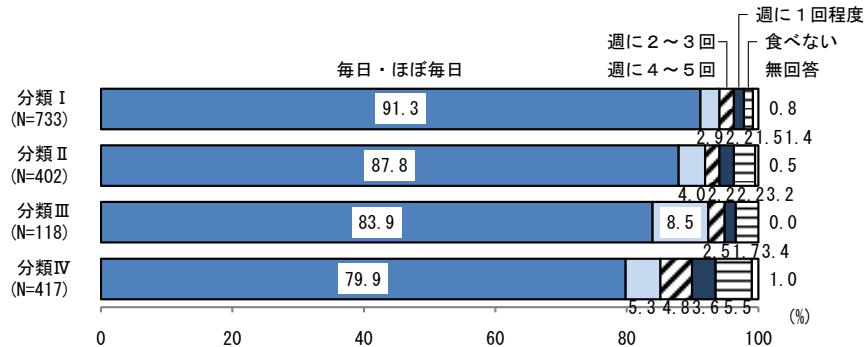
〔等価可処分所得別 子どもの起床時間〕



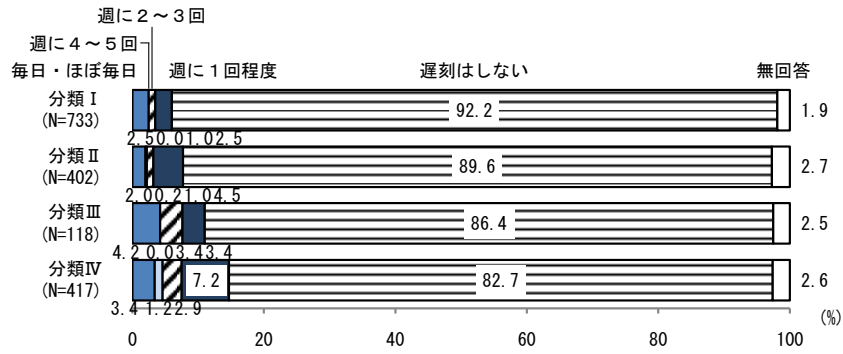
〔等価可処分所得別 子どもの就寝時間〕



〔等価可処分所得別 朝食の摂取状況〕



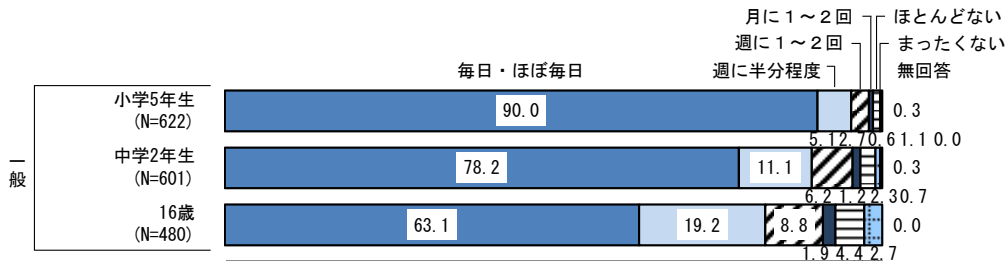
〔等価可処分所得別 遅刻の頻度〕



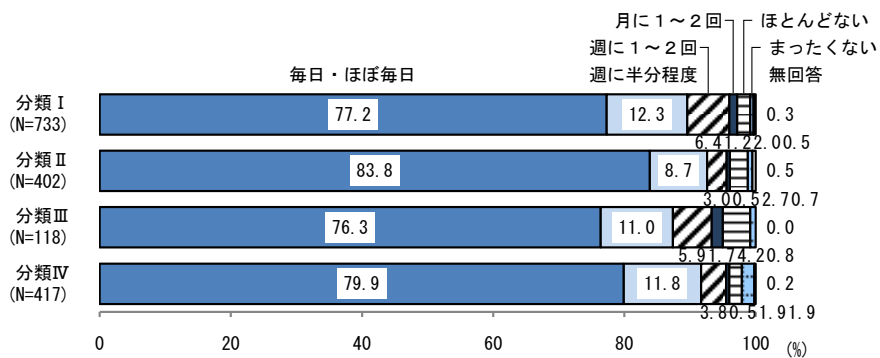
・ 孤食の状況（夕食を家族と一緒に食べているか）

週に半分以上の頻度で孤食の状態にある世帯は、年齢が上がるほど増加する傾向がみられますが、また、所得による傾向の違いはみられませんでした。

〔年齢・学年別 おうちの大人の人と夕食を食べる頻度〕



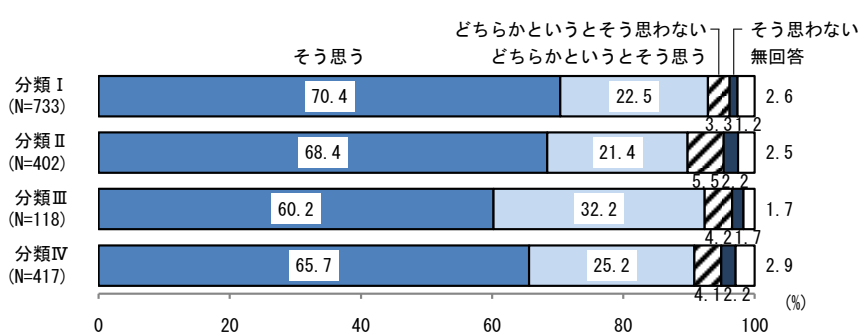
〔等価可処分所得別 おうちの大人の人と夕食を食べる頻度〕



・ 自分の家の居心地

自分の家の居心地をいいと感じるかについては、所得に関係なく 9割以上が「そう思う」「どちらかというと思う」と答えています。

〔等価可処分所得別 自分の家は居心地がいいと感じるか〕

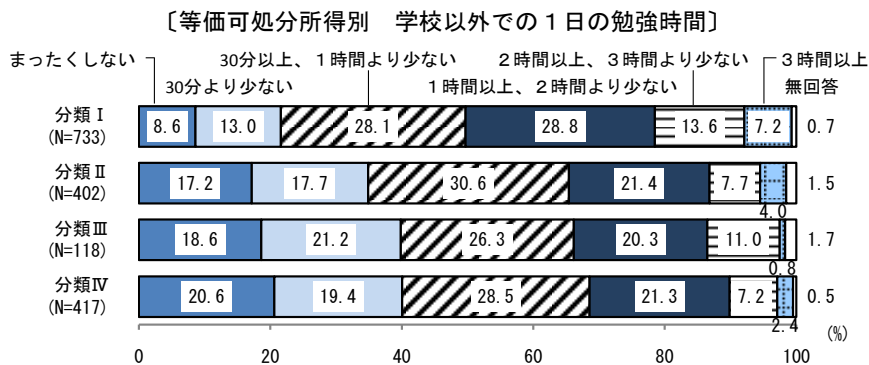


## 子どもの学習意欲、自己肯定感

貧困の状態にある世帯ほど、学校以外での勉強をまったくしない割合が高く、学校の勉強の理解度が低い傾向にあります。一方で、「自分に自信がある」や「将来の夢や目標がある」など子どもの自己肯定感に関する項目は、所得に関係なく高い割合で肯定的に答えており、家庭環境にかかわらず子どもは自分自身や将来に対して前向きに考えていることが分かります。

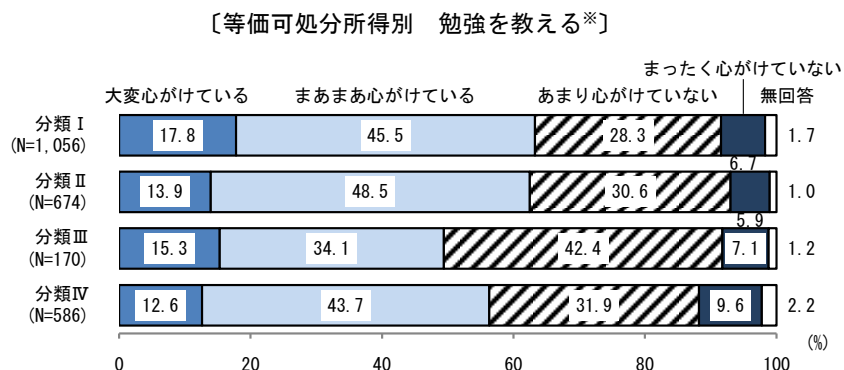
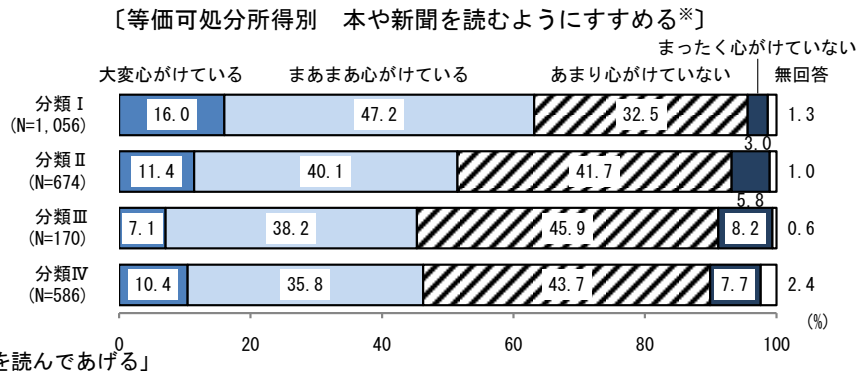
### ・学校以外での勉強時間

1日あたりの勉強時間（授業時間以外）は等価可処分所得が低い世帯ほど短くなる傾向があり、「まったくしない」割合は、分類Ⅰの8.6%に対し、分類Ⅳは20.6%と2倍以上も高くなっています。



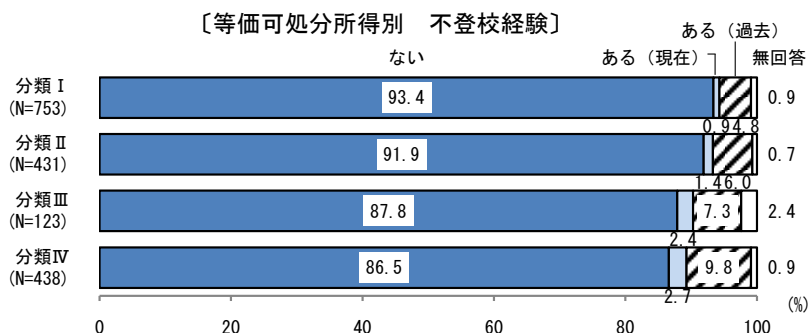
### ・親が勉強を教えるか

子どもとの関わりの中で家庭で心がけていることとして、「本や新聞を読むようにすすめる」、「勉強を教える」は、分類Ⅱ～Ⅳでは、分類Ⅰに比べて、「大変心がけている」の割合が低くなっています。



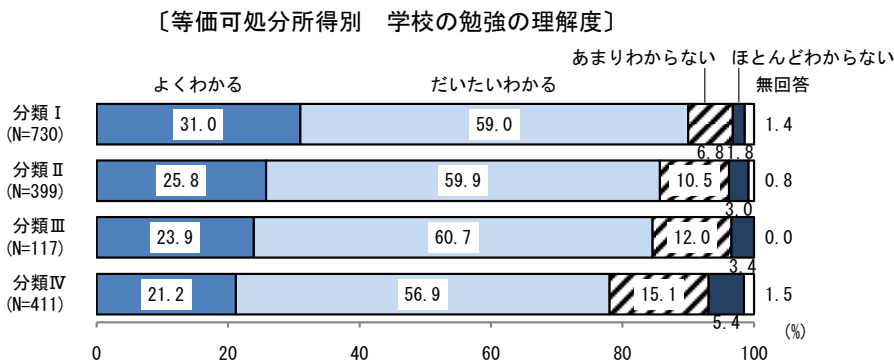
・ 不登校経験

分類Ⅳでは、分類Ⅰに比べて、不登校経験がある（現在・過去）の回答割合が高くなっています。



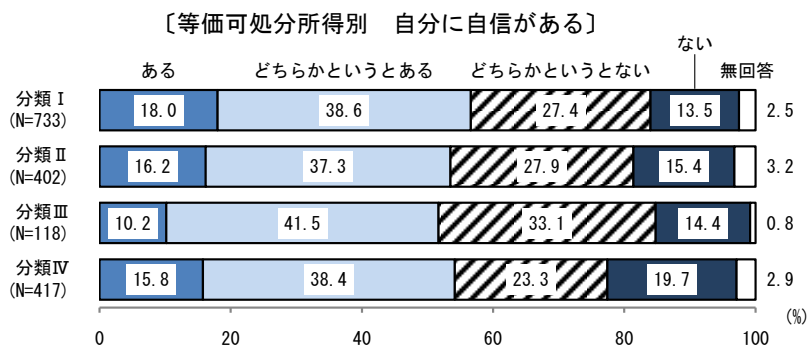
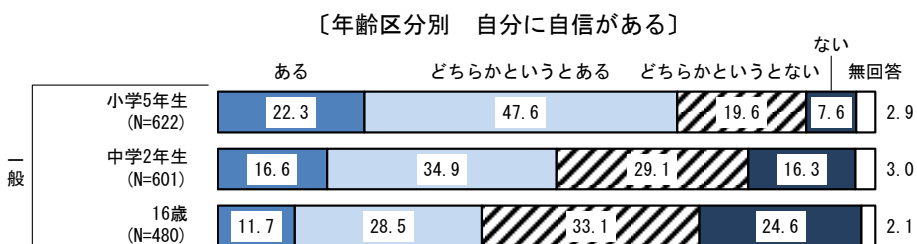
・ 学校の勉強の理解度

分類Ⅳでは、分類Ⅰに比べて、学校の勉強が「よくわかる」が少なくなっており、等価可処分所得の高低により理解度に差が生じていることがうかがえます。



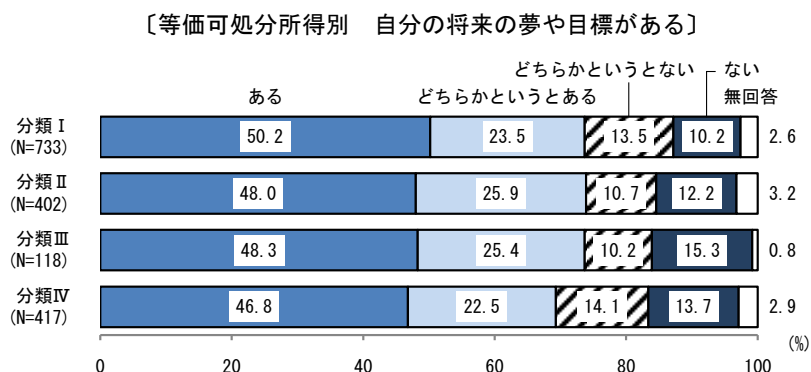
・ 自分に対する自信

「自分に自信がある」の割合は年齢が上がるほど低くなる傾向はありますが、所得にかかわらず5割以上が「ある」「どちらかというところ」と答えています。



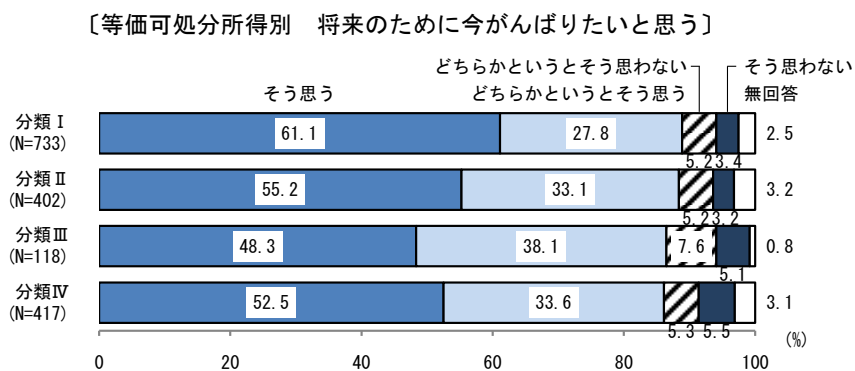
・ 自分の将来の夢や目標がある

「自分の将来の夢や目標がある」については、所得にかかわらず約7割の子どもが「ある」「どちらかというところ」と答えている。



・ 将来のために、今、がんばりたいと思う

「将来のために、今、がんばりたいと思う」については、所得にかかわらず8割を超える子どもが「そう思う」「どちらかというところ」と答えている。



・ 努力すればむくわれる

「努力すればむくわれる」については、所得にかかわらず約9割の子どもが「そう思う」「まあそう思う」と答えている。

